

ヤスクニ・レポ 206

「アメリカとはどんな国なのか」

代表 西川重則

1

トランプ氏がアメリカの大統領に正式になることが知らされているが、アメリカの国だけでなく、多くの国々で大統領の資格をめぐる反対運動が起こっている。前代未聞と言われるような出来事である。

それはとにかくとして、久しぶりに改めてアメリカとはどんな国なのかを考えてみたい。それは、戦後の日本とアメリカとの関係を考えればわかることだが、戦後71年の今日、なお日米関係は多種多様な面で、アメリカの現状、課題について、日本人として無視できない関係があるからである。無関心で事柄を済ますことも出来ると思っている日本人も多いかも知れないが、私自身はそうは思えない。以下若干の事柄を例に挙げて、アメリカとはどんな国なのかをじっくり考えてみたいと思っている

戦後私がアメリカの国を無視できないと思ったのは、たとえば日系アメリカ人がアメリカの北方に強制移住させられていたことを知り、それはなぜだったのかを私なりに考えざるを得なかった。そしてその調査のためにひとり旅のアメリカ行きを考えた。そして分かったことは、日米戦争が始まった時、ハワイも含めて日系アメリカ人が強制移住を強いられ、自由を奪われたが、なぜ日系アメリカ人であるか、アメリカ人として日本と戦争を強いられたにもかかわらず、戦後も長い間、自由が奪われていたことについて納得できなかった。

それはアメリカ本土だけでなく、日系アメリカ人が多く住んでいるハワイも例外ではなかった。日系アメリカ人だから、自由が奪われてもやむを得ないというのは、私には良心的に納得がゆかなかった。直接アメリカ人に質問しても明確に答えてくれなかった。

そうした事例は白人と黒人の問題も同様ではないかと思っている。周知のことだが、ノーベル賞をも

らったM・L・キング、Jr. 牧師の場合も例外ではなかった。岩波書店発行のローザ・パークスという黒人女性が、黒人であるが故に、バスに乗っていて、白人が同じバスに乗ってきた時、社会通念として黒人の彼女が白人に席をゆずろうとしなかったことが問題視され、キング牧師がバスボイコット運動を試み、リーダーとして白人対黒人の対立の解決を図らねばならなかった。よく知られるに至った公民権運動の一つとして発展するに至った歴史的事実をこの時点で報告しなければならない意味を考えて欲しいと思っている。

つまり、アメリカの南部は、白人対黒人の対立が存在していただけでなく、白人対黒人の対立の激化の事例として、今日の事例と言わねばならない。人間として、個の尊厳にかかわる国境をこえた国際連帯の確立をめざすべき、緊急課題であることを述べておきたい。

ローザ・パークスの事例が起こったのは1955年12月1日のことであったのであり、戦後71年の今年2016年から61年前の出来事であることを強調しておきたい。

2

さて、アメリカとはどんな国なのかと問われれば、私のアメリカ訪問もあり、ひとり旅の時、習い覚えた英語を使って、アメリカ人に質問しても、答えは必ずしもひとつではない。当然である。そこで、参考までに、アメリカ通の神谷不二氏がNHK市民大学で『戦後日米関係の文脈』というテキスト・ブックで解説をし、教えられたことが分り易く参考になろう。1984年7月から9月にかけてのテキストによる学習だが、次の通りである。パックス・アメリカーナをめぐる歴史の事実の一端であり、紹介したい。次の通りである。

「第二次世界大戦戦後の一時期をアメリカによる平和の時代、パックス・アメリカ

ーナの時代であったとすれば、そのパックス・アメリカーナが黄昏を告げ始めた時代が一九七〇年代であります。

六〇年代までのアメリカは、政治的、軍事的に『世界の警官』という役割を進んで引き受けていて、世界中のトラブルすべてを自ら一手に引き受けるという姿勢をとっていました。アメリカ大陸から一万五千キロも離れ、その土地にも人間にもおよそなじみがなかったはずのベトナムのジャングルへ、アメリカが最盛時四十五万名以上の大軍を投入したベトナム戦争は、アメリカのこのような基本姿勢を如実に体現したものにほかならなかったと言えます」（八八頁、参照）。

パックス・アメリカーナ（アメリカによる平和）と評価された時代に、多くのアメリカ人は誇りを持っているが、率直に言って、白人と黒人の人種差別の問題は今日も根本的に変ることなく、深刻な社会問題として位置づけられ、日本の新聞にもしばしば黒人の「暗殺」が報じられています。

私の研究のテーマのひとつ、M・L・キング・Jr. の「暗殺」事件も例外ではありません。アメリ

カ社会に人種差別を無くするために、彼がいかに努力したかは知る人は知っていよう。私も『福音と世界』（新教出版社の月刊雑誌）に、彼の非暴力平和主義の思想を報告、アメリカ社会の変革を強く望み、キング牧師の信仰の戦いを多くの人々に知ってもらおうと努力しているひとりであるが、その彼がアメリカ社会の深刻な問題のひとつである人種差別のため、39歳のキング牧師が「暗殺」されたことを今もなお忘れることができない私である。（私も彼の生涯、死について『福音と世界』に書いたが、岩波書店の『マーティン・ルーサー・キング』、マーシャル・フレイディ 福田敬子訳にくわしく報告されています）。

ローザ・パークスについて（D・ブリングリ、中村理香訳、岩波書店）も名著であるが、どちらもアメリカの歴史、伝統・文化について、人間本来の個の尊厳を重要視する国、社会を望む者にとって、アメリカ社会も日本の歴史・伝統・文化の本質について、個の尊厳の保持・確立をめざす私たちの生き方・あり方にかかわることを心に刻み、日々ベストをつくす課題であることを強調して終りたい（二〇一六・一一・一五）

*** 2016年10月例会奨励は
今回、都合により、掲載無しです**